菩提樹の花咲く頃

村夏越細

藏書家印

目次索引

梟……1
斷幻……3
夕暮……4
若さ……6
ひる前……9
川縁……10
午後……12
劇場の前……14
宵……16
夕雨……18
朝……20
夜……21
足臺……22
黎明……24
川原……26
夜半……29
橋上……31
白い柱……35
少女よ……38

夕闇……39
空……42
絃無き琴……44
わが夜……47
月……50
斜日……52
窓……54
直線……56
午後……58
生垣の露……60
わか草……63
古市の夜……66
さめぎわ……68
一夜……70
路上……74
淡愁……76
呆茫……78
織工……81
春……85

窓……87
死者の巷……89
耳……91
無限……92
死魚の眼……94
膜……99
名……101
眼の前……102
雀の死……104
客……106
その時……108
郷土……110
冷笑……112
日曜の朝……115
雨……118
春と海……120
アンヌ井……122
檀……124
雲よ……125

第三集

詩五十七章

菩提樹の花咲く頃

細越夏村

梟

「有明の月が黄色く疲れ切つた頃」と、お前は云ふ。

好し。その頃に私は、どす黑く懶弛けた町を忍び出て、

露に頸垂れた花の岸べに待つて居やう。

お前は、そゐに、灰色の薄布を頭から被つて、幽靈のやうに彷徨ふて來ると云ふ。

――左の乳房の下に、硫黄火のやうな青紫の花を挿して。

おゝ、あの氣息の苦しさよ。

早く、お前の胸の其の花を嗅ぎながら、

霧の濃い被方の森で、

羽毛を撒き散らしながら、

月の磨れ消えるまで啼き續ける梟の黑い歌

を聽いて見やう。

幻

幾又かに岐れた一本の指が

薊の枯れた、暗い空から出て、

私の額に不思議な合闘をする。

伸び紛つた卵の花の垣根。

螺形の幹の搦み合つた森。

蠟色の月が廢塔の屋根に沈んで行く。

夕暮

緑の堤の裾に
夕映の潮、暗い杏色のびろうどを延べ、
花の林、丘の白い家。

「醉ひの寂しさ……」
夢に泉の湧くやうに

囁く人よ、君が襟は寛ぎ、
花草に埋もれたゴンドラの舳見つめて、
若き友よ、軟かな肢体の重さを我に任せて。

靄に杳かな川下の吊橋に
アーク燈の紫い光。
白鳥が温い波に流れて行く。

若さ

潮よ、
雨ふる海の潮よ、
お前は、あの夕べ、何所まで歸つて行く？

あの島の彼方には、
もう、お前の泊る可き所も無い。
黑い潮よ、
重い暮れを荷負ふて、
あの薄闇を、何所まで迴つて行く？

お前は何か囁いて行く。
それが、——骸骨に藻草や貝殼の付いた、沖

の彼方の海の底へ、とも、
また、今、若い太陽の生まれかゝつた遠い
國へ、とも聞える。

……、待つて呉れ、あゝ、俺も行かう。
その二ヶ所の孰らへでも可い。

綠の森に紅い花を散らした岸べにでも、
寂しい鳥は啼いて居やう。
世界に、何所にだつて、悲みの無い所は無
い。

俺は、もう、あの青白い光に冷たく閉ぢられて居る事は到底出來ない。
何所へでも可い、だまつて流されて行きたいんだ。
潮よ、一寸戻つて來い
俺は、あの窓から飛び下りても、
お前の所までは届かないじやないか。

—（若き燈臺守の歌へる）

ひる前

鏡に映る花床。
燕の流れ。
開いた窓に碧い河が膨れ、
枠のかげから白いボートが湧いて行く。
大理石のベンチは若草の反影に薄く彩られ、
そよ風にクローバーの花が輕く頷く。
圓彫の柱脚に零れた白金の飾針。

長倚子の膨らみにたゆたふヘレオトロープの薫り。
何所かで、夢みるやうに、底を殘したアルトを歌ふ。

川縁

夕靄と我れと靜かに
薄黑い川波の緣邊を行く。

芽を吹いた枯れ林には
疎らの墓石が傾き、
煉瓦製塲の低く弛んだ屋根、
その上を重く蔽ふ寂默。
遙かの橋の上に朧けた電燈の星。
霧雨が煙つて來た。

曇つた日の滅び行く際、
夜の悲み來たる歩みの遲い時、
あの哀寂のそゞろと泌む我が胸の安らかさよ。
いつしか、とある木かげに佇み立ち、

夢路に疲れ痺れたやうな心地で、
川音の次第に遠く消え行くを聽く。

午後

鳩羽色の綿雲
枇杷の森から湧き、
臺椽のヒヤシンス、雨の球に微動ぐ。
頸を傾げた鸚鵡が囈語のやうに『ミス・L――』。

陳列棚に凭れて、
水色の小形の信紙
――あの胸の襞と同じ薫りのする――
その最初の一行――ダ・ヰンチが云ふた言
葉。
私の心は醉ふて悲しく驕る。
後園で七面鳥の聲。

劇場の前

鎖された劇場の寂しさ。
四十女よ、お前は、その前に立つて、何を
思ふて居る？

木戸口の唯一つの球電燈。
それを見上げて、白粉焼のした女よ、
お前は何を悲んで居る？

檜の舞臺には緑の幕が落ち、
お前の情史には、乾いた牛肉色の幕が落ち
たろう。

烏足（クローズフィート）の浮び出た眼の周圍。
厚皮の弛（たる）みかけた頬の小皺。

女よ、お前は、是から何所へ行く？
――呑み殘した酒盃（こかづき）を探すやうな眼付をし
て。

宵

花咲いた林檎畑に
鮮かな月が登り、
堀割に添ふ並木徑を、
牧場から、牛乳のバケツを提げて、
白前垂の少女が歌ひながら歸る。

丘には野火が燃え、
河岸には井オリンの旋律。

窓に腰かけて、
草垣の外なる人と
語り合ふ滑らかな聲。

テニス場の隅に立ち蔽ふ
楡の木に凭れてると、
……あゝ、故郷の昔の幼稚園よ！
あの裸母の笑ふ瞳よ！
線香花火の、盥に落つる音も聞える。

夕雨

雫の音を聽きながら、
遠い國の散る花を思ふ。

茗荷畑に夕ぐれの雨は煙り、
曇りを通り兼た鐘の音が、
遠くで、懶げに擴がり消えて仕舞ふ。

傘の人々は、夢みるやうに、
若葉のほとりを歩いて行く。

電燈の微然え初めた棧橋に
重く繋つた外國船よ、

雲のやうな蓋布の下には、
爲る事も無く、一群の水夫達は
各自の幻像のやうに佇んで居るだろう。

恍惚の人間と自然との内奥を這ひ迷ふ低調
の諧律よ、
萬象は、軟かにあやされて、
靜かなる昏睡に沈んで行く。

朝

花に雨けむり、
軒に鳩まどろむ。

若葉の濕(し)めり、
噴水盤の軟かな浮彫(うきぼり)。

石に映つる窓掛けの色。
花瓶(はながめ)のかげから細高音(ソプラノ)の囁き。

葉葡萄のアーチ。
化粧室の口笛——幻想曲(ファンタジア)。

夜

ピアノを挾んで、二人(ふたり)の眼は
最後の一群の出て行く扉口(とぐち)を見つむ。

倚子の根に落ち散つた花束の寂しさ。
門邊(かどべ)には動き出る馬車の音、電車の軋り。

窓の下には月の光青く積み、

……君のうら寒い眼の色よ、
互の顔を見越して遙かなる後方に見入る。

足臺

お前は、欄干に凭れたまゝ、
小さな海のやうな眼付で、
彼方の森の灯影を見つめて居る。
けれど、お前は、此の橋の裏面をすらも考
へた事が有るまい。

僕はね、花で織られた平野に坐つた時でも、
十二階の上に立つた時と等しく、
自分の足の下を思はずには居られない。

私は、常に、何かの上に載つてるのだ、と
云ふ念から離された事がない。
而して、いつかは屹度、此の足臺の碎ける
時が來る、と思ふて、
その時の眞逆狀に落ちて行く自分が痛快で
堪らない。

え？、だつて、君考へて見たまへ、
――僕等の身体は縛られては無いだろう。
けれど、歩かうとすると、
いつでも、みんな奇怪な足臺を履いて動か
なければならないじや無いか。

黎明

醒めかゝる綠の島。
涸れた砂溝の懶く開いた口。

崖から覗く雲。
冲の他々しさ。

脫衣小屋の根の砂に
半ば沈んだ髮針。
白塗の戸の鍵穴の冷笑。

ホテルの鎧扉のいぎたなさ。
肉の香に萎れた槇の葉。

白み行く日よ、
疲れた濱に何を約そる。

川原

栗林の墓山を逍遙ひ降りて、
廣い石川原を漫々やつて來ると、
淺い水の靜かに行くのが、何とおく心に泌
みて見渡された。

高い板橋の欄干に凭れて、下の流れを見つ
めて居る、青いモンパを襟に卷いた爺さん

と並んだ、顏の靑黑い意地硬そうな大年增
の女が、時々、手を翳し、眉根を寄せて、
次第に低くなる午後の日を待ちあぐむやう
に眺めて居る。

縞目も無いやうな、ぢゝむさい手織木綿の
羽織、
對手の横顏をチラリと偷み見る毎に突き出
る歪んだ下唇、
私の心は抑へ難く苛立つて、
何故か憎々しい其の女が川に落ちたら、と
思ふた。

麗らかな春の日は軟かに暮れかゝる。
……都會！　劇場！　艶美な水々しい女！
眼の醒めるやうな着物の薫り！　と、私の
心は、思ひ出しながら渇望する。

氣息が塞りそうに胸が波立つて、
しどろもどろに荒石の上をはつき回つた後、
ふいと、橋の上を見かへると、
もう二人の姿は掻き消したやうに無かつた。
思はず、ホッと吐息をついて、
私は駈けるやうにして橋の袂に登つた。

そして、妙に穴の明いたやうな心地で、
先刻二人の居たあたりに通りかゝつた時、
何故とも無く、私の眼には涙が湧き上つた。

夜半

温室のアケーシャ、
硝子の屋根に露滿ち、
巡り下りた星の疲倦よ。

今見る君が夢を想ふ。
夜半の幽凄よ、
あゝ、我れ初めて君を恠み恐る。

明るい明日よ！——謎の罠！
凍り行く心。
顫く纎緯。

繪蠟燭の瞬き。
盃に殘つた酒の黑さ。

橋上

深紅の電燈の影が、長く細い直線を、夜の河面に曳いて居る。
滿天の星は暗い。
欄干の無い板橋に霜が仄白く布いて、
遙かに低い水は音も無く、厚い闇の壓塞から滑り脱けて行く。
先刻、北の空を蠟のやうな隕星が青く流れた。
その時、インバネスの丈低い跛の男と、

毛の擦り切れた角卷の長い女とが、
氣息せき切つて、足疾にトッ、、と通り過ぎた。

その途端、男の肩にさゞめく若い女の嬌かしい肉聲は透き徹つて、媚びと誇りとの搦み合つた調子を背後の闇に流して行つた。
私は、說敎するやうな男の口調と、甘つたるい女の聲とに、
養え立つやうな憎惡と侮蔑とを以て
兩人の後をジッと見つめた。

眼に入るものは、眞黑い屋根の醜慘な連續と、
濕ほひも無い喬木のそゝぼけた輪廓とのみだ。

私は、物のみゝみ上げて來るやうな喉をグイと呑み下ろし、
膝頭に力を踏ん張つて、
組み摑んだ兩手の指をコクゝと鳴らした。
片側の岸から、噪がしい絃歌が濁流のやうに擠し合ひ衝き合ひムクれ出して來た。

私は握り緊めた拳を、
一歩前に踏み出しながら、
明るい窓を目がけて力任せに揮り抛げた。
而て、私は粗板の霜を蹴立てゝ、
家の無い、寒い岸をズン〳〵歩いた。

赤だみた月が、霧のもやつく彼方の石坑から喰み出して居る。

（あゝ、私は、今初めて咲く、誰にも見られなかつた、而て未だ名の付かない、新しい花を思ふ存分に踏み潰してやりたい。）

白い　柱

何所かに、白い柱が立つてるに相違ない。
その根には青白い花が咲き、永久の泉が湧いて居る。

ある夜、私は、其所に葬られた、と夢みた。

――私は、水の湧く音を聞きながら、草の下から、その柱を見つめて居た。

ふいと、群れを離れた一人の巡禮が迷ふて來て、その柱の頂上に、不思議な文字を書き付けて去つた。

そゐへ、町の人々が、樂しい歌を唱ひながら通りかゝつた。

そると、柱の文字は煙のやうに薄れて仕舞つた。

彼等の一人は、首を傾げて、少時、それを見上げて居たが、やがて、忘れたやうに、默つて、人々の後について行つた。

けれど、私の心は、滿足して、安らかな眠りに沈んだ。

少女よ

日の射を壁に凭れて、
花の中から立つ少女よ、
彼方の禿げた丘の上の
雲の影が這ふ砂原を見つめて、
お前は何を考へて居る？

あの砂原に
月の光が薄く漂ふ時、
そして、お前の足元のその花叢が雨に壊れ
た時、
お前は何所かで、あの悲しい象徴の意味を

解いて聞かせる日が來るであろう。
けれど、私は、その哀詩を綴り出をお前の
唇を眺めるよりも、
唯獨り、又、此所にさまよふて來て、
落日の光の殘る此の壁に對つて立たう。

夕　闇

「君、私等は斯うやつて一生若くて居そうだ」

廣い空地の木立の中をさまよふて居た時、友は、ふいと、斯う云ふた。

曇つた夕闇を覗き下ろゞ一つの星影も無い。また、彼方の枳殻の川端を通る人影も無い。周圍は、まだ日の光を吸ふた事の無い、新たに浮び出た島の平地のやうだ。

「うむ」、私は唯、反射的に云ふたが、自分の生の自由と平靜との意識が潮のやうに心に充ち擴がるを感じた。

私等は無言のうちに、いつか、電燈の耀く橋の上を歩いて居た。疎らに通る黑い人影は無意味に私等の側を流れて行つた。

私の心には誇りの波も歡びの渦も立たなかつた。

けれど、ふいと氣の付いた時、私の肩は輕く暢びやかに開いて居た。

空

空よ、
春が來て、君は、測られぬ深い青になつた
時、
その中を、金色に燃える瞳が徐かに回る時。
空よ、
君は、涯しも無く開いた大きな眼となつて、
私を眺め下ろす。
空よ、
夜が來て、幾千の星が、いろ〳〵の氣分と
情緒とで、野や丘や森や湖へ瞬く時、
空よ、
君は、謎と寂寥と恍惚との大いなる胸とな
つて、
萬象を其の中に抱き秘めて仕舞ふ。

君が悲む時、
青白い月が、巣も伴も無く、目的地もそらも
無い旅にさまよひ、
君が憂ふる時、
唇血に塗れた夕日が、喘ぎながら西へ沈ん
で行く。

あゝ、空よ
……けれど、君は亡せる事が出來ない。
その永久に存在せねばならぬ運命を、私は
氣の毒に思ふ。

絃無き琴

絃無き琴の寂しみ。
我れ、その如き町を暮ひ、

その如き少女の思深き瞳を戀ふ。
絃無き琴の哀愁。
我れ、その如き夜を暮ひ、
白日たま〳〵、廢墟の月の幻影を見つむ。
絃無き琴の底鳴よ。
我れ、その如き聲を暮ひ、
夕べ、現なく、想像は森をくゞり、
洞窟の奥へと耳を澄ます。
一夜我れ夢みき、

――青き隱沼、
そゐに、たゞ一片、ほの白き小さき花は浮び、
わが慕ふ瞳と聲ともて囁けり。

我れは咽びて醒め、
折からの月の光りに、
我が慕ふ寂しき町を
我が思ふ少女のさまよひて行く影を見たり。

その夜、我れは、奇しき秘呪もて、舌と足とを縛られにき。

かの夜の思出よ、
あゝ、我れは、たゞ、新しき悲みを遺されぬ。

わが夜

「睡り」そゞろに落ち來る時、
我れは悲しく、力なく、
永久に、獨りし、何所へか、

涯なき闇を、奪ひ行かるゝ心地すなり。

得あかぬ眼に仄立つ影、
——そは常に同じき影、
無限の中の一點に淀みて
おもむろに渦卷く色無き波の姿。

我れは、いつしか、夢の野を歩めり。
綠なる谿の斜面に
白樺の幹滑らかに立ち、
彼方には、輕き園亭の屋根赭色に這ひ、
花草の纏へる柱に凭りて、

ジプシイの少女、夢みる如き眼もて、
黑き指を斷絃の上に流せり。

我が胸には蜥蜴の舌赤く閃めき、
細く痙攣する襞立てゝ、心臟は吸はる。

我れは、終夜、かの黑き瞳と、あの赤き舌
とに樂られ、
かくて、我れは笑ひ、ほの〳〵と醒め、又
いつか、同じ夢へと睡る。

月

月よ、その靜けき光の
涯し無く波動し行く時、
我れは黃昏の葉蔭に沈み、
仄淡き潮のもくへ見送りて、
所も判かぬ遠方を漂浪ひて行く我が旅の姿
おぼろに思ひ夢む。

林の水の囁き、
森の花の香、

我があゝろ、また、そゐに逍遙ひ入り、
彩濃き土の文よ、
醉ひ喘ぎ、蒸されし如く、我れは壞れて溶
く。

月よ、その軟かき光の
ものおとに泌み行く時、
あゝ、我が心はあこがれ出で、
かなた、また、あなたに、浮き、沈み、漂
ひ、淀み、
うつゝ無く、夕暮は宵へ、宵は夜へ、そゞ
ろに流る。

斜日

斜日に明るき褐色の杉に、
腕枕して、見とれ在れば、
ふと、腦中に湧き迷ふ低調の短曲譜。

その斷片の一聯よ、
おぼろ夜の草野の靄に、
ふと浮び消えにし

淡白き小川の一うねり、
それにも似しか。

生よ、春よ、あゝ、煙の如く失せ、水銀の
如く逃がれ、
咲くとしも無き刹那の花の凋み、
その薄き香をいづゐにか探るべき。

我れは我が背を恠み、時に怖れ、
うら悲しくぞ前途の雲を覗く。

あはれ、午後の日の昏み行く時、

三時の音の二つまで鳴り了へし時
絶望のアゴニーよ、
……疊と額と髪の藪と……

窓

枯れ枝に雲來たり雲行く時、
雀よ、歌ふ勿れ、
波よ、沈吟む勿れ、
我れをして、しばらく、音なき自然の生活

に探り入らしめよ。
否！　否！　否！
瀧笛よ、鬨を揚げよ、
レールよ、哄笑せよ、
我が思索は、
海の涯より、野の彼方より、空の奥より、
土の底より、
彈かれし如く歸り來ぬ。

然り、
花の紅ゐも、葉の綠も、

我等が家の窓より視られたる美に勝る色は無し。

直線

森の彼方に『春』は其の内奥を夢みつゝ、深く霞める眼もて暢やかに我等の窓を見つむ。

日の一光流るゝ机の上に

我れは太き直線を描きて、
ふと、胸は底より躍る。

あゝ、直線の快感よ！
此の官能と此の享樂と！
君よ、又、我等が進行曲を合唱せしめよ、
――
「我等は青年なり――」と。

午後

「午後」よ、君は默想を。
靜かなる日の光を我が世に投げ、
我等と自然とを斜視せしまゝに、
寂然と、君は何をか冥想を。

我れは湯槽に立ち、
窓に染めたる木の影を見つめて、
「午後」よ、君の深さに思ひ入りぬ。

我れは耳を欹て、
「午後」よ、君が思索の幽かなる遠き響を追

ふ。

あゝ、「午後」よ、我れは君と在る時、
いつしかに、あらゆるものと、その量度と
を忘れ果つ。

かくて、空虛の裡に、たゞ、君と我れと在
り。
されど、君は、眼を閉ぢて、何をか思ひ續
く。

あゝ、「午後」よ、我れをして君が足を抱か

しめよ。
我れをして君が一語の微笑を仰がしめよ

生垣の露

月の夜よ。
汝は、我が憂愁をさへも、
遠き憧憬の靜かなる甘さと化せしむ。
……されど、——

淡き霞よ、
汝を追ひつゝ、幾小路、西へ、南へ、
汝は常に前方遙けく逃げ、
あゝ、我が心もだえ疲れ、
時に、唾ゐが如く、窶れし窓に井オリンの
低き呻きを聽く。
蒼白き朧ろの樹影、
月よ、霞よ、何故に、そが邊りをし戀ふ。
また、橋も無き、荒れたる水の上、
月よ、霞よ、汝等そゐに墓ひ佇む。

あゝ、翼無き者は地に足ぢり嘆き、
どよしへの恨み抱きて、花も無き生垣の露
に凭たる。

かくて、夜は、そゝろに更け、
月よ、霞よ、汝等いつしか去り、
我れたゝ獨り、死の領域に頸垂れて、
血の凍り行く寂しき音の斷續を聽く。

あゝ、月の夜の闇に還れる時、
限り無き憂愁は再び我が胸を鎖し、

數知らぬ星の群れは、悲しき瞳もて我れを
繞り圍む。

わ か 草

崩れたる石段に
月の光り露けく泌み、
裸かなる小山よ、
我れをして、懷かしき寂しき夢に迷ひ入ら
しむ。

根の朽ちし華表には藍青と金泥との昔の額
は失せ、
反屋根の薄くも瘠せし小き祠。
焼け野に似たる境内に
佇む月よ、その暗き面わ蔽はん枝も無し。

夜よ、明くる勿れ、
汝が蔭に潜まゞば、此の荒頽の、何所にか
忍ぶべき。

あゝ、『時』よ
汝の歩みは餘りに早く、強し。
荒き其の足よ、
願はくば、心して、軟かかれ。
あらゆる物の踏壞者よ、――汝、『時』。
されど、唯一つ、懷舊、あの人の心をば、
汝とても惜むや、
我が胸は、弔悼の潮ほしひまゝに溢れ、
いにし昔の風象ぞ涙誘ひて浮び續く。

崩れたる石段に
月の光り仄暗く晞噓り

裸かある小山よ、
我が哀傷は、若草の間に泌み行く。

古市の夜

古びたる寂しき町の彼方の夜より
花やげる劇場樂のうねりぞ細く漂ひ來たる。
薄赤き小電燈の笠の裏かる暗黒に佇みて、
昔ながらの小川の波の敲く音を

聽き迎へ聽き送り、沈む心に、
遲々として開け行く故郷のうら寂しさよ、
冷たく泌みて充ちにけれ。
汝を繞りて思出の限りも有らぬ桃の木よ、
疎らに咲ける花のけはひ、
見上ぐれば、あはれ、星の姿も窶れたる。
友木は截られ、たゞひとり、うらぶれて立
つ桃の木よ、
咲き佗ぶる、香も無き花と我が愁ひと、
滅び行く昔の町を弔ふ小夜ふけて、

今、洋樂の終りを飾るフラアリッシュは崩れて行く。

さめぎわ

朝の日の光は、思ひ深げに、寢室の窓に佇めり。

今朝、我れは、春の老いたる姿を驚き見たり。

夢も無き曉の眠り護りて、
花草の刺繍の艶なる、色濃きビロードの枕
よ、
疲れ痛む頑人の頭と、あゝ、奇しき矛盾に
汝は横はる。

花も無き北國の遲鈍の春の朝ばらけ、
南歐の花染キャラコ、
薄黑き生を罵る蠻人の
硬き肢体を蔽ふ夜着の
汝が宿世のはかなきかな。

暗き日の光は、思ひ深げに、寢室の窓に佇
めり
今、我れは、春の老いたる姿を驚き見つむ。

一　夜

長き死より蘇生りて、
今宵、ふと、故郷の町を歩めり。
青白き此の月影は

幾代昔に見し如く、
行き違ふ人々の黑き姿は
海の彼方の遠國にして見し如く、
また、此の橋よ、高岸の下行く水よ、
また、大槻の群立よ。
今宵、眼を迎ふる物おどに
我が仄かなる記憶は微笑みて認め頷く。

然れども、唯かの一人！
彼れのみは來たらず。
待ちあぐみ、探し疲れて、
我が心うづまき、

狂へる星の如くに、夜もすがら、町々を繞り翔りぬ。

終に彼れと遇はぜ。

あゝ、彼れ！――更け果てし
人無き、廣き町角を、
灰色の羊の群れに交りて、
笛の音に無限の寂寥を籠めつゝ、
しとやかに通りて過ぎし、紫蘇色の袂曳き
ける少女よ。

あゝ、終に彼れのみは來たらぜ。

仄白き霧立ち迷ひ、
人し無き町は枯野と消え變り、
我れは、又、とゐしへの死に歸らんとして、
振り返り〳〵、あゝ、耐え難く
彼の奇しき若き姿を偲ぶ。

路　上

綿もて蔽ひし如き空のいづゐにか
十日ばかりの月は巣おもり、

今宵は、漂浪の身をし忘れて、
近寄り來たる『春』のけはひをや聽く。

雪殘る役所通りの裏路に、
ほの温き朧ろの夜は靜けく更け、
檜葉垣の黑く圍める牧師が家は、
窓々の灯影のどかに、靜かなる和らぎの輕
さを籠め、
うす雪を被げる高き白塗の校舍は、
淡く、嚴そかに、野の如き運動場の奥深く
浮び、
新しき新聞社には杏色のカアテン重く垂れ

たり。

あゝ、わが心よ、今遠かにも、
遠き野中の大いなる湖水の朧ろ夜の岸べを
慕ふ。
——杳かかる彼岸の夜に溶け込める林よ、
丘よ、一點の灯火よ、
深く默せる坦らかの水面を流れて、
我が心、また、薄黑く、遠き彼岸の夜に溶
け泌む時
湖水よ、いかに冷靜に、あゝ、君は、我れ
を見送るよ。

淡

愁

ゐよひ、此の霞める花を胸に盛りて、
醒め在る夢よ、我れを何所へ誘ふとかそる。

静やかに月の光を吸ふカアテンの脈搏、
仄かかる灯かげに醉へる金屏の彩畫。

春は夜は漫ろに更けて、

思ひ出の、皆な悉に、咲き匂ふ。

吐息よ、花の香の如く、
恍興の重さに堪へぬ胸の靄より陽炎ひ出で、
あゝ、わが情緒！　その彩潮は
日南に歩む孔雀の王の群れの如。

月ある春の朧ろ夜の
更け果てゝ、たゞ獨り醉ふ現の夢の濃き底
に……哀愁よ、汝は何所より、
密やかに穿てる洞を遠透きて、
朦杳と暗く延びたる『死』の路よ、

あゝ、神よ、定運よ、しばし
待ちたまへ、――我れも亦た、忠實の僕た
る日は來たるべし――
我が髪の白うなるまで
『生』の燭の盡きかゝるまで。

呆茫

乳色の軟雲、

太陽は黄に假睡み
日は懶げに何事をか疲れ思ふ。

畑には薄き煙の柱圓く立ち、
水落ちて堀割の水門に
烏は頸を傾げて、己を忘る。

地平のほとり、草屋根は黑く呆け、
白き土藏は空の一點に似たり。
……あはれ、人の無き自然は無限の死屍な
るかな。

常磐木の濃き緑も、
若芽に赤む梢も、
暗として涙を呑めり。

今、我が心、此の同じ地の遠き彼方に
大都市の在るを信じ得ぜ、
又、在らん理を思ひ得ぜ。

今、我れは生を奪はれ、死に拒まれ、
神を見ぜ、惡魔に遇はぜ、
「自然」とも亦た、いさゝかの關聯をだに感
じ得ぜ。

織工

あの黄なる日光の色は、
遠き昔の午後の
木犀と沈丁花との厚き薫りを嗅ぎあてしむ。

過ぎ逝きし『時』の霞は
路傍の小石にすらも
虹よりも美しき色を與ふ。

彩し無き我が往年の起臥も、
回想は、今見る花の姿よりも
より深く我れを醉はしむ。

かくて、我れ、冥界の闇を唯獨り
とゐしへに流浪はん日も、
現し世の思ひ出は
花と薫りとの涯し無き煙の園を我れに擴げ、
追ひて來ん寂寥も、はた、悔恨も、
そゐに、我が影を見失ふ可し。

追憶の繪卷物には、
打ち絶えて、罪てふものは無し。
『時』は、いかなる醜惡をも
美しき夢と化せしむ。

あゝ、人の一生は
七彩の虹を織り行く、堅き、また、或は、
か脆き、幽妙の織機なり。

一瞬の斷隙とて無く、梭を操づる織工よ。
花の如き貴婦人も、
苔の如き、貧賤の寡婦とても、

孰れかは、皆な、各自に異なれる極彩色の
密畫の錦織らざるべき。

人々よ、歡び玉へ、
凡そ、世のいかなる一人にだも
『生』の此の陸離たる光彩は
配り漏れにし例とて無し。

春

川の彼方の地平の際に
鳩羽色の叢雲は、仄かなる赤味包みて、
情醒めそめし少女の胸の如く軟かに膨れ、
梢には、ふくよかの雀の數羽、野遊びの小
供の如く相寄りて、
互ひの顏に悅樂の心を讀み合ふ。
また、双の翼のびやかに空行く鳥は
祝宴の司會者の若き紳士が
喜び躍る心もて、忙しげに奔走るに似た
り。

あゐがれ來ぬる『春』の夢みげの瞳を見よや。

暖く霞める其の光には、凡そ世の如何なる
醜悪をも、心より愛し抱く色有り。

ピユリタンの聖壇にさへも
希臘の神々は來たり訪づれ、
そみに、禁欲と快樂とは
手を取りて睦み踊る。

死の神は、巳が暗き姿を愧ぢて、
夜の世界をも、ほの温きヴィナスの懷に讓
し、木の葉の蔭は、愛樂の秘房を護り、
燈火の街には、靈肉の不二を暗示するセレ

ナーデの旋律ぞ漂ひ亘る。

未來世の億刧よりも、人間は此の一秒に、
眞に、より多く生く。
『生』の内容は、枯れたる千年よりも、花咲
く一瞬に、より多く充實せらる。
其の充實の助力者――春は、今、我等が上
を遠く覗けり。

窓

春の夜の更け初めぎわのうら悲しさ。
朧ろなる林檎畑のそゐと無く
見入れるまゝに、ふと寄り添ひし窓のべの
去り難きかな。

……かくて、園には花蕾む春の夜の軟かさ
も、
わが胸の、常に同じき暗色の溶き皿に
又その繪具増さ哀愁ぞ溢れぬる。
春の夜の更け初めぎわのうら悲しさ。

朧ろなる林檎畑のそゐと無く
見入れるまゝに、ふと寄り添ひし窓のべの
去り難きかな。

死者の巷

春の夜の街に樂の音を聽きつゝ、
我が額は、いつしか、人の背に沈み、
地と人間との頌榮のメロディに渦卷かれつ
ゝ、我が心漂ひ行きて、

青黑き夫の星宿の裏をし迷ふ。

あゝ、誰れか星をもて瞳とかし、
深き夜の囁きをもて心の波とせん
見よ、呆茫として、怪しくも深き昏迷の面持もて、
人々は、活きたる狀も無く、狹き巷をさまよひ行く。

あはれ、我がたましひは死して生まれ
死したるまゝに滅び行くべし。
わが心よ、その肉壁と絶ち離れて、

あゝ、曾て、微動だも爲しゝ事なし。

耳

わが生には、たゞ、響あるのみ。
わが生には色彩と云はるべきもの無し。

なにものも、我が胸を彩る能はず。
なにものも、眼の窓を通して、我が心を拉し去る能はず。

我れは、たゞ、耳を殘せり。
あの耳は内と外とを相結ぶ唯一の鎖なり。
されど、眼の故に、耳を失ひし人々は、
我れよりも更に不幸からぜや。

無　限

喜ひと愁ひとを離れて、

此の森と湖とを眺めん日は、
我れを弔ふ鐘と輓歌と
わが胸に響き渡らん日あるべし。

光も、蔭も、
野に同じ情調を與へん日は、
わが夢にだも『生』の反映は失せぬべし。

されど、
その日、我れは舵無き舟に積まれ、
やがて、そあに、
新たなる疑惑と懊惱との彌(い)や廣き海は開け、

藻屑の墓と、島影とは
等しき力もて我れを誘ふべし。

あゝ、その老いたらん日よ、
限なき闇と、光ある無限と、
いづれとてか人間に甘かるべき。

死魚の眼

つくづくと見まもり在れば、

生くる物、世に何者か、
その顔の、人間に似ざるべき。

死したる魚の眼にそらも、口にすらも、
猶、そこに、人間に能く似し感情と氣分と
の表顯の著からぞや。

犬よ、汝の透明なる圓き眼の、
然までにも、我が胸の底の奥まで讀み拔き
たらん其の狀よ。

わが犬よ、まゐとに、汝の顔には、

我が同類の多數者の其れよりも、
あゝ、いかに、より多く耕されたる心の反
射盜るゝよ。

異族の友よ、嘆かぎも在れ。
耳に響くもののみぞ言葉ならんや。
いかに奥妙の音樂も、傳へ得ざる心の無か
らめや。

わが犬よ、汝はベートーベンの樂譜にも優
せる能辯の啞者なり。

また、梢に物思ふ鳥よ、

汝が黝く輝く圓き眼は、
いかなる刹那ありてか、我れに其の心を語
り得ざらん。

鳥よ、
汝が此の石燈籠と密やかに合圖し交はす瞬
間にも、
我れも亦た、燈籠の心と我が心とを繫ぎ能
ふ。

草かげに、盜み見る蛇の眼よ、
汝が巧みの瞬きは

エデンの園に咀はれしとも、
その以來、幾千年の最と苦き痛恨と忍辱と
は、今や、その瞳に謙遜と哀願との弱き光
を與へたり。
安んぜよ、――我れは知る――汝が眼は、
我が同族と握手せん事を願ふ。

見よ、花は燈籠を繞りて咲き滿てり。
また、空は、明るき胸の大いなる深みより
若き笑まひを鮮かに微笑めり。
鳥よ、蛇よ、凡て此の宇宙の同棲者よ、
少時を、あの花蔭に集ひ來よ、

聽け、雀らは、今、開會の賑はしき譜を最も旺んに合奏し在り。

膜

芽よ、
花のやうに、我が情緒は或色に展かうとし
て、猶だ堅く蕾んで居る。

塵に曇つた窓硝子が

内を透さぬやうに、
何か、くすんだ膜が
私の胸の上部に煙る。

私の瞳は凡てのものを映すけれど、
その奥に、何ものも焼き付けられない。

うか〳〵と、今日も、あゝまで歩いて來て、
ズッシリと淀んだ大氣の濕りを見まわし、
春だな、と私はボンヤリ思ひ出した。

名

空だつても、斯う名が付いて居れば、
あの、絶えぬ、何かの色の有る圓い高いも
のに蔽はれて居るのが、
どうも矢張窮屈で堪らぬ。

一体、何故、人間と云ふものは、
斯うも、見るものおとに直ぐ何とか名を付
けたがるのだろう。
損な事だ！

彼等は、然うやつて、自分から自分等の住所を狹めて仕舞ふ。

俺は、一生に一度、何かに、心のドン底から驚倒して見たい。

……あゝ、若しも、俺が、死んでからもう一度、あの世界を眺める事が出來るならば！

眼の前

何故？

地球が其れだろうじや無いか、

——絶え間なく漂ひまわる島とは。

君、だから、大きな事を話し合ふのは、もう一切止めに爲やう。

大きな事を思ひ初したら、

僕等は、それを極度まで小さくして考へなければならないんだ。

それよりも、先づ、あの微風の心地好さは

如何だ。
あの青葉の色を見たまへ、
而て、あの幹の間の陽炎の具合をも。
ね、斯う、直ぐ眼の前に、あんな面白いものが無數に有るじやないか。

雀の死

雀よ、
お前が死んで、

世界は、今、その所有の一つを失ふた。
花やかな、四月の朝の日光も、
あの不愉快な缺陷を蔽ひ得ない。
新たに明いた此の一つの空虛、
あの寂しさは、天と地との凡てを越えて漲る。
『生』の去來は、宇宙の最も深い秘密と嚴肅とだ。
お前の死と、伊藤公の其れと、
その間に、孰程の差異が有ろうぞ。

綿に包まれたお前の小さな死骸、
私は、一國の滅亡に對してよりも、
もつと深い感動を以て、
お前の閉ぢた其の眼に見入らせられる。

客

窓は皆な開け放し、
その枠には最も鮮かな若葉を捲け。

そして、その草色のテーブル掛けのビロードには
輕く軟かな白い刺繍を爲なさい。
今日、私は微風を招待いて、一日を樂しく暮さうと思ふ。

だから、入口の扉には錠を掛けるが好い。
而て又、壁の書棚をば、あの濱と林とを描いた畫布で蔽ひなさい。
私の最愛の客——微風は、
海の上の濶い清さと、木立の中の穩かな涼しさとを好む。

今日、我等の竈(みづし)には「爽かさ」の神が微笑(ほゝゑ)み、晴れかな靜默が、凡てと隔絶(かけはな)れた、より廣い世界を造る。

その時

うら〳〵かな春の日なかに、花が、つひ、うと〳〵と假睡(まどろ)む時が有るやうに、

私は、あの若い、躍る心をもて、賑やかな、樂しい世に住みながら、周圍の凡てを忘れ果てゝ、靜かな詩を作る時を持つ。

その時は、一日のうちで、私の一番強くなつた時だ。私はペンをインキに浸した時、砲兵が大砲に彈藥を裝塡(こめ)た時よりも、もつと破壞的の壯烈な心地にある。

その時、小銃や短劍をもて

奮闘する歩兵隊の進軍のやうな世間が、
いかにも小さく、力なく見受けられる。

あの誇りに、私は、毎日、自我の滿足と、
生存の價値とを見出して行く。

郷土

煤けた白い窓掛け。
紋紙貼りの天井。

船室に似た小部室。

春の夜の十時過ぎ、
ランプのみが明るく、
仰臥して、歌唱ひながら、
昔の長い漂浪が
悲しく思ひ浮ぶ。

あゝ、郷土よ、
その静かな夜は、
知らぬに過ぎた旅愁を
しみ〴〵と味ひ返させる。

窓にさそ青い月の光。
静かに更けて行く夜。
我が髄の遽かに枯れて行くのが感ぜられる。

冷　笑

机の縁に大きく廻る木理を見るにつけても、
あゝ、波の高い海の沖よ、
岩島の岬の頭に立つ鷗よ、

帆の影を悠々と曳きながら水の上を輕く滑り行く船よ、
身と心とに束縛の殊に多い今よの時。
それらの廣さと自由と而して寂しさとが、
耐らなく羨ましい。

今、私は泌々と思ふ
――屋根の下の赤黑い惱乱や悶惑や、
あゝ、それらの如何に小さくも憫れなるよ。

われは、夜深く、滿天の群星皆な搖られ墮ちて、

黝黑の大海忽ちに紅爛の炎焰漲り狂ふ漠野となつた時、
飈々の大颶風に一塊の身を扭ぢ捲かれて、
一氣に、千尋の底へと拋たれる刹那の壯絶を想像せる。

されど、我れは又、それよりも更に遠い偉大を思ひ轉せ、
――蘚苔も這ひ得ぬ天涯の大巖角、
白い太陽が卑しげに臆々しく其れを盜み仰ぐ時
其所なる森嚴の鍼默と、深肅なる驕傲とよ。

……あゝ、我が眼よ！　今はからぜも三尺の机面に落ち還り、
小さき已が明日よ、我が思念は何時しか其所に潜み惑ふ。

……否、々、我れは絶望せず。
海よ、山よ、見よ、わが唇は、最も純なる冷笑を滿ふるを得。

日曜の朝

何となく、幼い昔に返つたやうな日だ。
日も照らぬ、鳥も啼かぬ、
青葉は皆な、霧ほどの雨に、垂れて居る。

外廊に立ち、窓の敷居に肘を載せて、
薄暗い室の向ふ隅に
埃の包んだ油繪を見つむ。
その入り日の村よ。
幼かつた日の夕暮の
馬の足音が、うら悲しく耳の底に湧く。

靜かな日曜の朝よ、
壁にかゝつた洋服、
あれを着て、昨日、私は何の爲に出て行つ
たのだろう？

あの心地の溶けるやうな軟かさよ。
斯うやつて此所に居ると、
私は、どうしても、今、乳母に搜されて居
るやうに思ふ。

雨

あの雨は、遠い山かげの
石坑の深い底に沼を湛え、
絶え間なく波紋を擴げる水の上には
散つたさつきの花が靜かに浮いて居やう。

私の心は、その花を追ふて、
暗い石壁のほとりを漂ひながら、
驀くらに駈けて行く電車の屋根
に降りそゞく雨脚を、遠く想ふ。

鉄欄の橋には洋傘の圓頂が群れて動き、
劇場の繪額を遮つて、若萌えの柳の枝が緑
りを洗はれて垂る。

その河岸の花崗の緑を渡りながら、
私の心は、村里の、厩の前の泥濘に
碎け落ちた椿の花へ
嘴を差し出す牡鷄の
雨に崩れた尾羽の濕れを想ふ。

春と海

けふ、太陽は初めて湧いたやうな光を漲らせ。
野の葉は淡いしろがねの色に照り。
丘越えて南へ走る電線は輕く搖らぐ。

花咲く前の春の爽かさは
遠い山の裾から我れに來たり、
我れを誘ふて、大洋の船の
軟風にはためく帆の下に想ひ行かせる。

芝草の緑を踏む馬の鈴の響きは、
南洋の砂糖黍苅る大鎌の音と聞き交へ、
川の岸行く村人の輕い歩みは
五月柱へと急ぐ西歐の農夫と見まがふ。

春よ、大洋よ、
我れと、あらゆる人との、頒たれぬ全一の
大いなる實よ、
今、わが心は、我れと、我が國とを超えて、
世界と人類との誇りと歡びとを樂む。

アンヌ　牛

白金の綿、
――あの雲は、今朝も、また、空のあの同じあたりに浮き、
行くとなく、いつしか、あの綠濃い杉に入る。

四月の微風に、
白く耀く木の葉は、かるかに輕く躍り、
野面には、澄み透る陽炎舞ふ。

わが心よ、いづゐにか潜み、
ものゝ隙からわづかに春を覗き見て、
また、同じ懶い眠りに沈む。

岸蔽ふ草の蕾うつす小川に添ひ、
うらゝかに射る日を浴びて、
鉛の胸はゐぶ足よ、
確かな歩みを刻んで、いづゐへ行く。

樽

『君は町へ行くのか、
あの寺へ。
而して、その樽の中には
君の嬰兒の死骸が入つてるのだね』。

路を訊いた農夫は
スタ〳〵と山を降りて行く。
その背には夕闇が重なる。

沈む日の曳き殘した光が

花の峠に消えた時、
いつも待つ、野の涯に來る星をも忘れ果て
、、
私は首垂れて、考へながら、
坂の湖の岸をめぐつた。

雲

よ

青々と、晴れ渡つた時ほど、
空もく雲は、いとゞ寂しく、さまよふであ

ろう。
空には花も無い。

太陽は、うら〳〵に輝いて、
満ち足つた心の穏かさをもて、
静かに、高く、笑みながら行く時、
雲よ、お前は、内に膨れる悒快を推し包んで、
倦み疲れた旅を懶げに續け、
やがて、抑へ兼た其の鬱悶に破られて、散り消えて仕舞ふ。

地は春の花の間から、
雲よ、お前のほの暗くうらぶれて行くさまを見つめる時、
私は、しみ〴〵と、自分の生が思ひ見られる。

終

明治四十三年五月廿五日印刷
明治四十三年五月廿七日發行

定價送料共金參拾五錢

著發行兼者　岩手縣盛岡市內加賀野三　細越省一
印刷人　岩手縣盛岡市內丸卅一番戶　堀內政業
印刷所　岩手縣盛岡市內丸卅一番戶　九皐堂　電話三二一番

發行所
岩手縣盛岡市內加賀野三
悠々書樓